（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　八木　はるな

白先勇（パイ・シエンヨン、はくせんゆう、1937 ～）は日本の国語辞典が「台湾の作家。桂林生れ。白崇禧の子。台湾大学在学中に雑誌「現代文学」を創刊。カリフォルニア大学で中国文学を教える。作「台北人」「孽子」。」（『広辞苑』第６版）と記すように、中国大陸のイスラム教徒で広西派軍閥の領袖将軍の息子として生まれ、戦後に台湾に移住し、米国の大学の中国文学教授を務めたが、何よりも台湾のモダニズム中国語文学の代表的作家である。

本論文は白小説改編における白自身の創作行為、白小説の改編に携わった映像作家や舞台監督らの思想、改編者たちと白自身との協働の様相、改編作の受容者という四つの視点から、白小説の改編作が持つ社会的意味を論じるものである。

第 1 章「エグザイルとしての在米中国人―― 1965 年白先勇小説「謫仙記」から 1989 年中国映画『最後的貴族』へ」は、原作小説を新たな視点で分析した上で、中国映画監督の謝晋（シエ・チン、しゃしん、1923-2008）による映画化改編の意味および謝に全面協力した白の意図を考察した。第 2 章「白先勇小説の台湾「本土化」をめぐって―― 1985 年台湾映画『孤恋花』の意義」は、白の自作小説の映画化をめぐる再創作行為を探求し、東アジア現代史をめぐる彼の思想を論じた。

第 3 章「「中国で生まれた台湾歌曲――台湾テレビドラマ『孤恋花』における「孤恋花」」は、同性愛を描いた長篇小説『孽子』等の白作品を精力的に改編した曹瑞原監督による「孤恋花」のテレビドラマ化の意義と、当時、中国伝統劇の崑曲の復興活動に尽力していた白先勇の思想性とが共鳴する様相を分析した。第 4 章「白先勇小説『孽子』の映画・テレビドラマ・舞台劇への改編にみる、台湾セクシュアル・マイノリティ言説の変容」は、白作品の中でも世界的に最も広範な読者を持ち、台湾で三度改編されてきた（1986 映画、2003 テレビドラマ、2014 舞台劇）白の代表作をめぐり、台湾セクシュアル・マイノリティ表象を検討した。

本論文は、各監督ら改編者による白文学再創造の実態を明らかにし、異なる時代の異なる文脈にあわせて白文学の意義が脱構築されていく過程において、白自らが往々にしてそれを促す原作者でもあったことを解明するという顕著な成果をあげている。各章の統合性および異ジャンルへの改編に関する間テクスト研究の強化という課題を残すものの、本審査委員会はその内容が博士(文学)の学位を授与するに十分な水準に達しているとの結論を得た。